

さて、わたしの父は高度経済成長期の仕事人間でした。その父はどういうわけか、日曜学校を家に誘致し、家を日曜学校にしました。遊びたい盛りでしたが、逃げられず、それが信仰生活の始めとなりました。仙台にいたときは、教団の教会ではないのですが熱心な先生たちでした。

それは父が若いころに牧師が戦地に派遣されて不在となり、父は徴兵されるまで、教会学校で教会を守っていたようです。仙台の間はそうして過しました。

さて、わたしの父が洗礼を受け、わたしも受洗した母教会は秋田県の横手市にある秋南教会といえます。十幾つかの家の教会を主にした広域伝道の教会で知られていました。瀬谷重治牧師は授洗者八〇〇を数え、病院、幼稚園、また全戸がキリスト者という村を持っていました。総合伝道の教会でした。「信徒の友」にはたびたび紹介されています。教団では伝道圏伝道という地域伝道のモデルのように位置付けられていました。わたしの家族が父の家に戻ったときはそこには集会がなく、牧師が別の家の礼拝に行く途中で訪問を受けました。瀬谷牧師は人を惹きつけるのですが同時に近寄りたく魅力的ではありません。受洗は高校の時にあります。その頃には牧師について行って礼拝を守るようになりました。

牧師からは使徒信条の手ほどきを受けました。わたしの信仰の形成はのろまでした。十字架の恵みや罪の認識にも時間がかかり、神学大学に行こうというのにも時間がかかりました。むしろ、キリスト教でありながらそれが

分かっていることに引っかかっていた。それが、解決しないことには先に進めないような思いがありました。しかし、大学で学べばかえってわからないことが増えていきます。学園にはそういうところがあります。

神学校では度々召命が問われます。留まることができたのは、自分と聖書の場合が重なり合うことにありました。聖書には自分に触れるものがある。それは、神様が語り掛けることです。自然のよう過ぎ去って、死んでゆくものとは違っているのです。そこには失われていかない確かなものがあるという思いは変わりました。

イザヤ書に「主の栄光があなたのしんがりを守る」(イザヤ五八・八)「しかし、急いで出る必要はない／逃げ去ることもない。あなたたちの先を進むのは主であり／しんがりを守るのもイスラエルの神だから」(イザヤ五二・一二)はびったりして心強いものです。わたしは先に立つことは身に付いていません。後ろにいる方が自分にふさわしいと思っています。

預言者は、主なる神がしんがりに立たれると言います。しんがりは殿さまの「殿」の字を使います。預言者は後ろを守るものの恵みを知ることを教えます。

むしろ神は、後ろに立たれるのです。急いで出る必要はないのです。

ですから奉仕できないと思うものも、交わりが得意でないものも、賜物を持たないものも招かれているのです。役に立つから、ふさわしいからではありません。信仰の主体は自

第三主日(三月一六日) 公同礼拝

「神の子の死と救い」 高橋和人牧師

詩編 二二・二五、二五

マタイ 二七・三二、二六

第四主日(三月二三日) 公同礼拝

「永遠の命を得る」 姜 俔米牧師

イザヤ 四九・六

使徒 一三・四二、五二

第五主日(三月三〇日) 公同礼拝

「われらを守りてキリスト」 高橋和人牧師

詩編 六三・二、九

マタイ 二八・一、二〇

分の方ではなく招かれるお方にあります。

先んじることが大事なことではなく、招かれる方を信頼し、応えることにあります。それも、その方は後ろを守っていてくださるのです。ですから信仰では落ちこぼれることがないのです。使徒パウロは、「わたしは、使徒たちの中でもいちばん小さな者であり、使徒と呼ばれる値打のない者です」(コリントの信徒への手紙一五・九)と言います。パウロは復活の主に出会ったのも最後だと言います。

さて、信仰には洗礼を受けることが必要です。それは招いてくださる方が、その招きを受けるようにと、待つておられるからです。すると、その人の人生の意味が変わります。招かれた人生です。早ければ良いのですがもちろんビリでも構わないのです。この教会で何度も病床洗礼を行いました。生涯の終わり